

女性改革者たちの社会福祉ネットワーク

―アダムズ『ハルハウスの二十年』

山口 ヨシ子

I カレッジ・ウーマンの就職活動

1

ジェイン・アダムズ（一八六〇―一九三五）は、二十世紀初頭のアメリカである婦人団体が行った調査で、「歴史上もっとも偉大な女性」の上位三人の一人に選ばれ、もっとも「社会的に有用な現代アメリカ人」という人気雑誌の読者向けアンケートでは、トマス・エジソンに次いで第二位の座を獲得している（デイヴィス二〇〇）。社会改革者、社会福祉家、平和運動家として、アメリカのみならず、世界中にその名を知られ、一九三一年には、その活動に対してノーベル平和賞が授与されている。一九二三年（大正一二年）には来日を果し、日本の社会事業家、女性運動家、労働運動家などに多大な影響を与えたともいわれている（木原へい三六四）。大資本家の家に生まれた彼女が、産業資本主義社会の歪みとして生じた貧困の問題に取り組んだ「ソーシャルワーカーの母」としての生涯は、当時のジャーナリズムがこぞって用いた「聖ジェイン」「民主主義の天使」⁽¹⁾などの呼称にも窺えるが（フラデン 九五）、その出発点にあるのは、大学教育を受けた女性の社

会貢献を願う姿である。

アメリカにおける女子高等教育は、女性に与えられた領域でエキスパートになるためには女性雑誌が与え得る以上の教育が必要だという考えのもと、南北戦争後とみに盛んになった。⁽²⁾東部では、ヴァッサー、スミス、ウェルズリーなどの女子大学が次つぎと設立され、西部でも、一八六〇年以降開校した州立大学が男女共学となったが、女子学生たちの多くは、卒業後「何もしないというもつとも辛い仕事」に悩むことになった（スターレット 一三）。「女性らしさ」を可能な限り伸ばそうとする趣旨のもとに発展した女子教育は、その概念で卒業生たちをしぼり教育の結果に矛盾が生じていたのである。

ハーヴァードやイエールなどの男子エリート校に負けないカリキュラムをそなえた名門女子大学で学びながらも、学生たちは、「女性の小さい脳では高等教育の厳しさに耐えられない」「物事を深く考え過ぎると生殖機能に悪影響を及ぼす」といった科学者たちの主張に悩まされ続け、卒業後も「女性らしくない」という理由で意義ある仕事に就けないことが多かった。「真の女性」は、「信心深く、純粹にして従順、かつ家庭的」であるべきとする価値観が（ウェルター 一五三）、娘の高等教育に熱心だった中産階級層を支配し、良家の子女は貧しい女性たちのように賃金労働に就いて「身を落とす」ことはないと考えられていたためである。

アダムズは、イリノイ州ロックフォード大学の第一期卒業生であった。この学校は、宣教師を同様に多く輩出していたことから、「西部のマウント・ホリヨーク」と呼ばれていた女子セミナリーであったが（T二三）、大学への昇格によって、第一期生には試験によって学位が与えられた。アダムズは学士号を取得したのち、「医学を学んで貧しい人びとにも生きたい」（T三二）と願ってフィラデルフィア女子医大に進むが、健康上

の理由などから一年で退学し、その後は自らが「精神的落ち込みのどん底」(T四一)と呼ぶ長く厳しい「就職氷河期」に直面する。暇があるのに何もしていない恥ずかしさを感じながら、自己存在の意義を問う日々を過ごすのである(T四二)。二度にわたる渡欧などを経て、社会の最下層の人びとと生きる決意をし、アメリカにおける社会福祉事業のパイオニアとなるが、大卒女性第一世代としてのその「就職活動」は、自分に適した職業を作りだすことから始めなければならなかったといえるだろう。

アダムズが一九一〇年、五十歳のときに出版した自伝『ハルハウスの二十年』には、「困窮者と人生を分かち合う」(T六五)ことを目的とした社会福祉事業センター、ハルハウスの開設が、貧しい人ばかりか、大学卒業後無為の生活を送って精神を病んでいた彼女自身や同様の境遇にあった女性たちにも救いになったことが記録されている。八年間のモラトリウムを経て、彼女がシカゴで始めた社会福祉事業は、とくに女性たちのネットワークを拡大し、「健全な精神と肉体の貴重なる源としての労働から切り離されていた」(T六一)当時の大卒女性たちに活躍の場を提供することにもなったのである。

ハルハウスは、アダムズ自ら「シカゴのトインビーホール」と呼び、「トインビーホールから派生したもの」(T二三五)であることを明らかにしているように、ロンドンのトインビーホールにおけるセツルメント活動の実践に倣ったものである。セツルメントとは、社会的弱者の良き隣人であることを目指した社会福祉事業センターで、地域に定住し(to settle)、「人類は連帯すべき」という哲学を実践するものである(T六八)。アダムズがシカゴに開設してから約十年後の一九〇〇年までには、アメリカのほとんどの主要都市に広がり、百近くのセツルメントが開設され、一九一〇年までには四百にも及ぶが、その多くは女性たちによって運営され

ていた（エヴァンズ 一四八、トラットナー 一四三）。一八七〇年には一万一千人（全学生の二十一パーセント）、一九〇〇年には八万五千人（全学生の約三十七パーセント）と女子学生の数が急速に増え、次つぎと輩出された大卒女性の多くが、セツルメント運動に関わることで、女子高等教育が無駄ではないことを証明したのである（バナー 九九）。

結婚するか、女性への偏見をさらに押しのけて大学院に進み法律、医学などの専門職を目指すか、当時は比較的地位が低いとみなされていた教師や看護師のような仕事に就くか、という少ない選択肢のなかで、大卒の女性たちは、セツルメントで働くことで、女性も男性同様、「力があり、革新的だ」と証明し得ると考えていたのである（バナー 九九）。ウェルズリーなど東部の名門女子大学の卒業生の半数以上が初期のセツルメント活動に加わり、ことにアダムズが父親の反対で入学を断念したスミス大学などでは、その比率が八十七パーセントにも達している（ルーマニア 四八―四九）。十九世紀末に大学へ行くことができた若い女性の比率は二パーセント程度であったが、その優秀な能力の大半がセツルメント活動に注がれたということである。

エリート女性の能力がいかにセツルメントに注がれたかは、ハルハウスの例をみても明らかである。アダムズは、ロックフォードとともに学んだエレン・ゲイツ・スターと一緒にハルハウスを始めているが、読書会や芸術教育などに取り組んだ彼女のほかに、多くの女性改革者がハルハウスから生まれている。全米消費連盟の事務総長になるフローレンス・ケリー、連邦労働省児童局の初代局長となるジュリア・レースロップ、シカゴ大学で教鞭をとり、女性初の国際会議代表としてパンアメリカン会議に出席するソフォニスバ・ブレキンリッジなど、その多彩な顔ぶれは枚挙にいとまがない。ハルハウスで公共政策などの修練を積んで飛躍を遂げた

このような女性改革者たちのなかで、とくにケリー、レースロップ、ブレキンリッジが、アダムズ同様、政治家の父親をもっていたことは、興味深い共通点である。彼女たちが男性であれば、父親同様、政治家となって社会改革に挑んだかもしれないと思われるからである（スクラー〈2〉 六六二、木原〈1〉 五五—五六）。

アダムズは、学生時代に宣教師になることを拒否しているが、セツルメントの仕事は、大卒女性の多くにとって、「聖職者や教師という職業の代替物、つまり、理論を実践に移し、説教や指導よりも実践することを可能にする職業だった」ということであろう（トラットナー 一四二、木原〈1〉 五五）。『二十年』においても、アダムズは、「アメリカの若者は、理論を行動に移す必要性を敏感に感じ、セツルメントという形の行動にすばやく反応している」と述べ、大卒女性たちの行動への意欲を力説している（T六五）。

大卒女性たちの多くがセツルメントに参加した理由として、もう一つ考えられるのは、それが「家」の形をとっていたことであろう。女子大学がより優れた「真の女性」を育てる目的で設立されたことにも表れているように、アダムズをはじめ、十九世紀末に大学教育を受けた女性たちの多くが、女性には特有の役割があると考え、女性参政権運動などにおいても、「女性自身の問題に直接かわる権利」を主張の柱としていた。⁽³⁾ セツルメント・ハウスは、その「女性特有の役割」をきわめて創造的な形で発揮できる場所であったといえるだろう。

当時の大卒女性のほぼ半数は結婚しなかったが（ソロモン 一一九—一二二）、「若者を教育し、貧しい人びとの世話をし、女性と子どもの健康を増進させる」といったセツルメントの仕事は、「母親としての技術と能力を、より必要としている世界に開放するのだ」という主張の後ろ盾となったとみることができる（エヴァン

ズ 一四八)。女性が高い教育を受けると生殖機能が侵されるという批判に対しては、知的な女性は「より優れた母親になれる」と強調する一方で、結婚しない女性は、「女性特有の家庭的な側面をより広く社会に還元している」という主張に、セツルメントが適っていたということである(二四八)。ハルハウスは、チャールズ・ハルという家の持主の名前をとって名づけられたものだが、このハウスという名のもとに、女性たちがともに住んで新しい形の家族を築き(スミス・ローゼンバーグ 二五四)、シカゴという巨大な家の「家事」にあたっていたと考えていたのである(ビューラー 三七一)。ハルハウスは開設一年目から五万人の人が利用したといわれている(木原 へい 一〇二)。

アダムズがハルハウスを拠点として実行した社会福祉事業は、保育園、子どもの音楽クラブ、ダンスクラブ、老人招待新年会、大学講座等々、さまざまに及ぶが、本稿では、女性や子どもを支援するために行った初期の改革に焦点をあててみたい。とりわけ、労働保護法などへの取り組みや、働く女性のための宿泊施設ジェイン・クラブの開設などにおいて、いかに女性たちのネットワークが機能していったかを、『二十年』に記されたアダムズの考えや活動の報告などと照らし合わせながら考えてみたい。

II 多民族都市シカゴにおける社会福祉事業

アダムズがシカゴにハルハウスを開設するのは、セオドア・ドライサーの長編小説『シスター・キャリー』の主人公キャリー・ミーパーが、野望を抱いて地方からシカゴに出ていくのと同じ一八八九年である。この小

説の十八歳の主人公がシカゴで挑む就職活動は、アダムズたち大卒女性のそれと比べればきわめて簡単で、キャリアは屈辱的な思いはするものの、第一目目にして靴工場の仕事を得ている。仕事が容易に見つかるのは、未熟練の女性労働力が安価な消耗品として機能している証拠で、仕事内容といえば、誰でもすぐできる単純作業である。

キャリアは、「仕事を厳しくして、賃金を安くすれば利益があがる」(三〇) という方針の劣悪な環境の工場で、機械を用いた流れ作業に長時間耐えなければならない。週給四ドル半では、四ドルの下宿代を払えば、通勤費さえ残らないが、移民三世の平均的アメリカ人の彼女が最下層ではない。彼女が「最下層の女工」(二八) と呼ぶ搾取工場の娘たちは、狭い部屋に大勢押し込まれ、埃と油にまみれて週給三ドル半で働いている。アダムズが目指したのは、巨大なる産業社会でその労働力が「消耗品化」されているこのような最下層の人びとの隣人として働くことである。その活動概要は、「より高度な市民的・社会的生活の中心となること、教育的・慈善的事業を起こし、それを維持すること、シカゴの工業地帯の諸状況を調査し、改善すること」(T五九) というハルハウスの憲章に明らかにされている。

アダムズのハルハウスにおける試みが、モデルとなったトインビーホールと異なるのは、その運営がおもに女性によって行われたということに加えて、「貧困に苦しむ近隣の人びとの重荷を分かち合う」対象の多くが「新移民」であったということであろう。当時のシカゴは、アメリカの工業的発展を誇示するかのような世界博覧会を四年後に控えて、百万都市として膨張しつつあったが、その四分の三以上が南欧や東欧などからの移民であった(トラットナー 一三五)。政府がフロンティアの消滅宣言をするのは一八九〇年のことであり、

仕事がより簡単に手に入ることを目論んで、移民が大量に都市へ流入していたのである。

アダムズがハルハウスを開設した地区は、産業が急速に発達した結果として生じた「人間の窮乏と苦悩」(T三七)がもつとも顕著に表れた工業地区の最貧民街である。女性たちがセツルメントに関わることに對して、ある新聞は、「汚れない若い人が悪徳に満ちた不吉な場所に住むのは百合が泥沼に落ちていくようだ」と書いたが(スカダー 一三九)、アダムズの認識は、まったく異なっていた。人類愛への情熱をもちながら方向を見失っている大卒の女性たちも、貧窮の生活を送っている大多数の者と同様に「哀れ」で、両者は互いに「補完的だ」(T六四)というものである。この認識にこそ、「社会福祉という近代の職業」(ゴードン 三一)を発見し、実践した精神が表れているといえるだろう。

アダムズは、二十以上の異なる民族が住んでいたシカゴの最底辺地区に居を構えながら、社会を「本質的に相互依存的」(T四九)ととらえ、階級や民族などの違いは互恵的な関係を生み出すものとみなしていた。「人間を平等にしているものは分け隔てているものよりも優れていて、基本的な類似性が適切に強調されれば、人種、言語、信条、伝統などの比較的本質的ではない違いはこえられる」(T五九)と考えていたのである。この考えは、トインビーホールを創設したサミュエル・バーネットの教えでもあるが、同時にアダムズが受けた教育の成果であったともいえよう。学生時代に多読した著作の影響、ことに産業主義の不正を暴きだしたジョン・ラスキンなどの影響や(ナッシュ 五九)、幼き日に個人の基本的人権への限らない敬意を教示した、奴隸制廃止論者の父親の影響などを認めることができるだろう。ハルハウスの劇場の壁面にその若き日の姿を飾っていたエイブラハム・リンカーンや、同じくその耕す姿を飾っていたロシア人作家レオ・トルストイの影響

なども加えなければならないが（ボラチェック 一〇一）、前者からは「民主主義の意義」（T三四）を、後者からは道徳的人道主義を学んだとされている。⁽⁴⁾

南北戦争後の急速な産業の発達にともない、十九世紀末のアメリカでは、貧富の差が激しくなり、ごく少数の人間の幸せが多くの人々の犠牲のうえに築かれるという状態が加速した。ジョン・D・ロックフェラーやアン・ドリュー・カーネギーなど、戦後の混乱期に乗じて巨万の富を築く人が続出し、「アメリカの夢」の実現者として賛美される一方、同様の夢を追って世界中から集まりながらも挫折する困窮者がニューヨークやシカゴなどの大都市でスラムを形成していた。ジェイコブ・リースが『もう半分の人びと』で示したスラム街の「多様な群集」（二二）の悲惨な状態は避けがたい現実となったが、そのような状態を増長させたのは、当時のアメリカを席捲していた社会進化論である。これは、チャールズ・ダーウィンとハーバート・スペンサーの進化思想にもとづくもので、「適者生存」の論理が現代社会にも適用し得るとする考えである。貧しい移民の身から独力で巨富を築いたカーネギーは、社会進化論の「もっとも有名な大衆的代弁者」として、貧者は運が悪いのではなく、能力がないだけだという持論を展開していたといわれる（ナッシュ 六四）⁽⁵⁾。

社会的・経済的地位にかかわらず、個人の尊厳は尊重されるべきだとするアダムズの考えが、敗者が「淘汰される」ことで人類の進歩があるとする社会進化論の主張と相容れないことはいまでもない。社会進化論の論理でいけば、政府の困窮者救済政策も、民間の慈善事業も、人類の進歩をさまたげるものとなるからだ（ナッシュ 六四）。アダムズは、社会進化論に反対の立場をとっていたレスター・フランク・ウォードの『動態社会学』などに影響を受けたといわれるが、「機会の平等、経済的安定、最小限の人間の尊厳を保障するため

には、特権をもつ者ともたぬ者との間で政府が仲介者の役割を果たすべきだ」というウォードの考えは（六五）、「社会の底辺にいる人間が社会構造の欠陥に直接触れている」（一九八）として、女性や子どもを救済するための法規制に取り組んだアダムズの考えに通じるであろう。

『ニューヨーク・トリビューン』紙の記者であったドロシー・リチャードソンは、一九〇五年、搾取工場に自ら潜入体験して書いた『長い一日 ニューヨーク・ワーキングガールの物語』を出版した。単純労働に長時間従事する女工たちの悲惨さが共感をもって描出され、当時の労働状況を知るうえで貴重な小説であるが、一貫しているのは、中産階級出身者としての作者の視点である。その最たる特徴は、女工の悲惨さや道徳的墮落の根本的原因を社会構造の欠陥に見いだすよりも、階級などの違いに起因する個人の問題にしている点である。リチャードソンの姿勢は、当時の中産階級層の典型とも思われるが、この点が、貧者を社会構造の欠陥の最大の被害者とみなしていたアダムズと異なる点であろう。

Ⅲ 労働保護法制定への取り組み

ハルハウスが初期の段階で行った改革の一つに、働く女性や子どもを守るための法規制への取り組みがある。国の富の八分の七を一パーセントの金持ちが保有していた当時のアメリカで（ナッシュ 六四）、貧しい九十九パーセントの大半を占める移民たちの生活改善の手段として、イリノイ州の労働法規の制定に向けてハルハウスがパイオニアの役割を果たしたのである。児童の雇用年齢を十四歳以上とすること、工場などで働く女性

の労働時間を週四十八時間以内に短縮すること、長屋（テナメント）での搾取労働を禁止することなどである。長屋で搾取構造の下請け内職をする母親の足元で、何時間も仮縫いの糸を引き抜くボヘミア移民の四歳の少女、長時間の工場労働で家計を支える十二歳のイタリア移民の少女、三ドルの借金を苦にして自殺する十三歳のロシア系ユダヤ人の少女、工場労働による疲労が極限に達して身もち崩す娘など、ハルハウスの周辺でつねに見られた事例であったが、そのような状況を改善するための労働法の制定にハルハウスが取り組んだのである。

この取り組みの中心となったのは、三人の幼児を連れてハルハウスに來たばかりのフロレンス・ケリーであった。彼女はコーネル大学を卒業後、チューリッヒ大学院で学んでエンゲルスやマルクスの著作を英訳した才媛であったが、当時は、ヨーロッパ留学中に結婚したロシア人の夫の暴力などに悩み、離婚調停中であった。ハルハウスは、このような彼女にとって、「駆け込み寺」になったばかりでなく、子育て支援を受けながら意義ある仕事ができる場、さらなる「国家的な仕事をする」訓練の場にもなったのである（スクラー〈1〉一七二、〈2〉六五九）。

ケリーは、一八八七年に「慈善事業における理論的準備の必要性」という論文を書き、慈善事業のヴィジョンを明確に示していた。「社会病理の根本的治癒は労働者を搾取するシステムの終結」（九五）にあるとし、従来の慈善活動を「労働者から奪ったものを少しだけ返しそのシステムを少しでも長く持続する」（九二）ためのブルジョアの「姑息なまやかし」（九五）にすぎないと批判していたのである。アダムズ自身、ハルハウスに「慈善（philanthropy）」という語が適用されることを好まず、自分たちの仕事を「よき市民としての義務」とらえていたが（ラーシュ 六一）、大学や大学院で法学や行政学を学び、マルクス・エンゲルスの論理

で社会福祉論を展開していたケリーの参加によって、ハルハウスは変貌を遂げたのである。それまでの文化的・教育的活動中心の慈善団体から、地域諸団体と連携して社会改革を推進する社会福祉事業団体への変貌である（スクラー〈2〉 六六四）。

労働保護法の制定に向けてケリーがハルハウスで行ったことは、まず、改善すべき実態を科学的に証明することであった。州の労働局に、シカゴの労働搾取構造と児童労働についての調査を働きかけ、彼女は自らその任にあっている。世論に訴え、政治家たちを説得するために、改善対象を社会科学の視点で調査すること、その後ハルハウスに定着したばかりか、今日の社会福祉調査などにも影響を及ぼしているといわれるが（木原〈2〉 九一）、ケリーは、ハルハウス周辺の世帯を出身地や収入別に色分けして地図を作り、一目で低所得の移民世帯の分布がわかるようにしたのである。

低賃金の下請け内職を生み出す搾取構造の詳細や児童の長時間労働の実態についても、綿密な調査にもとづく数値で示して分析を加え、問題の所在を明らかにしている。この労働調査は、のちに『ハルハウス周辺の地図と報告書』の一部として出版されているが、その方法は綿密かつ科学的で、とくに児童労働によって生じる健康被害の調査などは、ボランティアの医師を動員して数カ月かけて行い、職種と病気の実態が詳述されている（五八一―六五）。ケリーの調査方法がハルハウスに定着したことは、アダムズが、法制化を確実にする有効な手段としてデータ収集・蓄積の重要さを『二十年』で強調していることでも明らかであろう（T六八）。

ケリーは、改善すべき実態を明らかにしただけでなく、改善を法制化によって実現させるために、地域諸団体との連携にも力を注いだ。⁽⁶⁾ ハルハウスはケリーの肝いりで、一八九二年にイリノイ州女性連盟に加盟してい

る。この連盟は、子どもや女性の福祉向上を目指して、労働組合や禁酒同盟など、労働者階級、中産階級双方の女性団体約三十が結束したものである。ケリーはその連盟の代表者に手紙を書き、「児童労働問題は強固な団体や労働組合と連携した女性たちの後ろ盾を得て、立法化することによって解決され得る」と力説している。シカゴではGFWC（女性クラブ総連合）も組織されていたが、ケリーはアダムズ主催の講演会で女性クラブの会員に搾取構造について講演し、その賛助も取りつけている。中産階級の女性を中心とする文化的・社会的活動団体であった女性クラブが、「子どもを救う」ということで、政治問題にまでその活動範囲を広げたのである。ハルハウスは、シカゴ地域の女性団体のネットワークと連携し、協同することで、立法化への道を確実なものとしたが、ケリーは、その道筋で中心的な役割を果たしたといえるだろう。

アダムズは、『二十年』で「私たちは法律が通過するまで文字どおり毎晩、労働組合、慈善団体、教会組織、社交クラブの公開集会で演説した」（T一〇九）と書いている。シカゴの女性名士に働きかけ、ともに州議会にくり出しロビー活動を行ったことも記録している。こうして、中流階級層の女性たちの援助をも取り込み、女性や児童の労働改善を謳ったイリノイ工場法は、一八九三年、州議会を通過したのである。この法制化について、メレディス・タックスは、ハルハウスが重要な指導力を発揮したことを認めつつも、その力は、一八九〇年代のシカゴにおける女性団体の複合的なネットワークの一部にすぎず、アダムズが自分たちの働きを過大評価していると主張している（二五—六四、三〇二—〇三）。だが、この主張こそ、ハルハウスが工場法への取り組みをとおして、外部団体と連携し、社会福祉のネットワークを築いた事実を示しているといえよう。

アダムズは、貧者を救おうとする社会主義者の献身的努力に敬意を表しながらも、社会主義の教義を受け入

れることはなかった。ケリーがハルハウスにいた時期は、労働集会が警察官に襲撃されたヘイマーケット事件の数年後のこともあり、ハルハウスでは「労働社会科学クラブ」の会合も毎週開かれていたが、アダムズは、社会主義者が「階級意識の論理に依り」「信条の一致」を求めすぎるとして、自ら社会主義者になることはなかった（T一〇〇）。だが、「煙をあげている火山」（ウィーラー 四九）という綽名のこの熱血女性社会主義者から社会主義思想の影響を受け、互いの能力を認めあったその友情関係は生涯続いたといわれる（スクラーヘー 一八三）。このことは、ケリーがその自伝においてハルハウスにおける日々を「積極的に活動した幸せな七年間」（七七）と描写していることから明らかであろう。

IV ジェイン・クラブの開設

ケリーのハルハウスにおける仕事をとおして、労働者階級出身の優秀なリーダーが育っている。メアリー・ケニーである。⁷ケリーはイリノイ工場法が州議会を通過したあとも、その法律が施行されていることを確かめる工場査察官になり、労働者保護に関心の薄い知事によって解任されるまでの四年間、十二名の部下とともに労働法が遵守されていない工場を摘発する仕事をした。ケニーはその部下の一人であり、副工場査察官を務めている。貧しいアイルランド移民の娘であった彼女は、病気の母親を抱えて十四歳から各種の仕事に就き、シカゴの製本工場では女性労働の残酷さを改善するための組合運動をしていたが、ハルハウスと関わることで飛躍を遂げている。ケリーとともに労働調査に携わり、のちに副工場査察官となっただけでなく、ジェイン・ク

ラブという働く女性のための共同宿泊施設を作り、初代の会長になってその民主的な運営を実践したのである。ケニーは、その未刊の自伝でハルハウスが「人生の新しい意味と希望を与えてくれた」と述べているが、当初はその基礎学力を向上させるために英語の授業なども受けている（三五）。ハルハウスとともに歩んだ日々は、自らが述懐するとおり、早々に学校を辞め、仕事を始めた女性には、そのハンディを認識しつつ、それを乗り越えた日々であったといえよう（三五）。

ハルハウスが、労働者階級の女性の能力をさらに引きだす場となった例は、たとえば、ポーランド系ユダヤ人移民でハルハウスの英語教師になったヒルダ・サット・ポラチエックやケリーの片腕として働いたアルジナ・ステイブンスの例など多々あるが、ケニーもそのような一人である。ケニーはAFL（アメリカ労働総連盟）初の女性オーガナイザーとなったばかりでなく、結婚後ボストンに移ってからは女性労働者を援助する仕事などで活躍し、一九〇七年には労働省の工場査察官に就任している。大卒女性の多くがそうであったように、女工であった彼女もまたハルハウスを飛躍の足がかりの場とし、さらなる発展を遂げたのである。彼女の参加によって、ハルハウスの活動に確実な労働者階級の視点もたらされ、大卒女性たちと階級をこえた互恵関係が成立していたことは、彼女がケリーの信頼を得て働き、アダムズやスターらと深い友情関係を築いていたことから明らかであろう。

ジェイン・クラブは、ストライキ中に寮を追い出されることを恐れ、離脱する女工が多いことから、自分たちの寄宿舎をもち、互助精神を深めたいという発想のもとに生まれたものである。家族から離れて下宿や寮で暮らしていた女工にとって、住む場所を失うという理由で労働運動に参加できないことはさらなる窮状に陥る

ことだったのである。

当時の女工たちの住環境については、「寮で休息し眠ることは実質的に不可能で、ベッドは二段で、船のようであった」というケニーの体験談からも推測がつく。彼女にとって、個室を得たことは、「考え、休むことができる」ようになった「人生の大事件」だったという。ジェイン・クラブは、女工たちがおかれていたこのような住環境を改善する対策として、「会員相互の慰安と向上を確保し推進する」ために「住宅を供給し、維持すること」を目的として開設され、「会員は食住をともにし、費用や損失、利益を平等に分担する」という協同組合方式で運営されたのである。

ジェイン・クラブは、ベアトリクス・ポッターの『共同組合』をともに読むことから準備を始め、一八九一年、ハルハウスの近くに二戸分のアパートを借り、製本工、靴製造工など七人の会員でスタートした。ハルハウスが家具の費用と最初の一カ月分の家賃を支払ったが、その後はすべて会員が共同で運営にあたった。二年後に見学に来た労働省長官が、「労働省が調査した協同組合事業のなかでも、女性によって開設され、運営された事業で成功したものは今までなかった」と言い（T七三）、アダムズを喜ばせた。三年後には、五十名の会員が五つのアパートに住むようになり、四年後には、正式に法人組織化している。最終的には、三十名を適切な数と考えて運営にあたっていた。

一九〇〇年の調査によれば、シカゴで働く女性の約二割が家族や親戚と離れて下宿などで暮らしていたが、このような宿舎を必要とする女性労働者は『シスター・キャリア』の主人公のように、「若く、独身で、アメリカ生まれの白人」ばかりではなく、多様性に富んでいた。⁽⁸⁾むしろ、若い独身女性は三割程度で、残りは離婚

女性や寡婦などであった。ジェイン・クラブが会員の年齢を十八歳から四十五歳までの独身女性としているのは、このような当時の状況を考へてのことであろう。

家族と離れて当時のシカゴで暮らしていた女性のうち、もっとも多かったのは外国生まれの白人で、ジェイン・クラブには、このような外国生まれの会員もいたが（ブラウン 三八九）、一方で、「黒人」がいたという記録はみあたらない。ハルハウスは、黒人が社会福祉からも除外されていた当時にあつては例外的に平等主義の姿勢を貫き（トラットナー 一四五―四六）、そのことは、N A A C P（全米有色人種地位向上協会）を設立したW・E・B・デュ・ボイスの講演会がリンカーンの誕生日に行われていたことなどからも確認できるが、ジェイン・クラブに黒人女性がいたことは確認できない。この事實は、黒人女性が工場労働などから締め出され、「家政婦」など、住み込みの仕事をしていたことを示すことでもあろう（ヒル 一〇九）。実際、当時のシカゴでは、家を離れて働く黒人女性の比率は、家政婦などの住み込みを別にすれば、数パーセントときわめて低かったのである。

当時、家を離れて働いていた女性たちが、社会的体面を保つなどの理由などから、できるだけ家に似た居住環境を望んだといわれ、親戚の家や個人の家に下宿することが多かった（アイゼンシュタイン 一二二）。同時代の作家シャーロット・パーキンズ・ギルマンの作品に、下宿屋を経営することで経済的・精神的自立を果す女性が多いのも、家を離れて働く女性にとって宿舎が最重要問題の一つであつた当時の状況の反映であろう。ギルマンはハルハウスで三カ月を過ごしているが、たとえば、『ベニグナ・マキャヴェリ』における下宿屋運営の描写や新しい家族形態への提言などは、ジェイン・クラブの当時の様子を連想させるものである。

ジェイン・クラブでは、宿屋や個人の家に下宿しているような快適さを維持しながら、プライバシーと自主性が保障され、門限などもなく、各自の判断に任されていた。女工が貧しさなどから道を間違える例も少なくなかったが、アダムズは「街にきて、真面目に生計を立てようとする娘はいかに夜を過ごすかを十分に知っている」と言い、会員の自主性を重んじた。会則が整備され、会長や会計なども選挙で選び、すべて集会を開いて決定するという、きわめて民主的な運営が特徴であった。寮監や運営する団体などもなく、会員は友人などを自由に招くこともでき、一泊、一食、各十五セントと決められていた（ウィットクーム 八七）。ケニーは母親とともに移り住んだが、ケニーによれば、母親は、会員たちにとってほんとうの母親のような存在であったという（八〇）。

ジェイン・クラブは、会員が金を節約し利益を得ることができる「産業的」宿泊施設であったが、会員に楽しみや救いを提供する社交の場でもあった。「社交的なことも、財政のこと同様、協同組合精神に満ちていて、私たちはいろいろなことを一緒にした」とケニーは自伝で述べている（三五）。会員たちは、ハルハウスの夜のクラスに参加するばかりでなく、自分たちで、パーティや音楽会などを開き、クラブの記念日なども祝った。家族とはじめて離れて暮らす会員が多いなか、薄給の女工は、このような行事をとおして、寮生活を送る女子学生同様の経験を積むことができた。汚い工場で単調な仕事をくり返していた女工には、宿泊と食事を提供する以上の救いの場ともなったのである。アダムズの名前が付けられていることにその思い入れの深さが表れているが、彼女はハルハウスの見学者には必ずジェイン・クラブも案内したという。

ジェイン・クラブの成功は活字メディアでも取りあげられ、雑誌や新聞の記事をとおしても、その概要を知

ることができる。たとえば、一八九七年八月号の『エグザミナー』誌には、働く女性たちによる協同組合形式の運営が経済的試みとしても異例であるとして、開設後五年間、会員の満足と利益を満たす運営がなされたことを評価する記事が掲載されている。ロンドンにおける同様の試みが成功しないにもかかわらず、シカゴでは年々発展し、会員が長く留まる理由として、その生活の独立性が保たれていること、自ら運営に携わっているという自覚がもてることなどをあげ、働く女性たちの可能性を信じたアダムズに成功の秘訣があったことを示唆している。働く女性が運営する、働く女性のための組織がうまく機能していることを、経済的・社会的実験の成功としてとらえているのである。

女性雑誌『グッド・ハウスキーピング』の一九〇〇年十二月号では、貧しい長屋が密集したところにある「魅力的な」住居として紹介されている。この記事で興味深いのは、開設後十年近くたっても、依然として一週間三ドルの会費で運営していたことである。会で雇っていた料理人が作る食事のメニューまで紹介され、朝食は「クリーム入りオートミール、コーヒー、トースト、薄切り牛肉のグレイビーソースがけ、アップルソース」とある。夕食も同様に立派なものであるが、「三ドルこれが賄えるのか」という記者の質問に会員の一人は、五年間住んでいて超過分の割当て金を払ったのは二回だけで、それも少額だったと答えている。同時期の働く女性の物語で、『シスター・キャリー』の主人公が四ドルの下宿代を姉に支払えば寒さを凌ぐ服も買えず、『長い一日』の主人公が住むところを失い、飢えと孤独のなかで放浪することを思えば、いかにジェイン・クラブ運営が成功していたかは明白であろう。

ケニーが初代の会長としてスタートしたジェイン・クラブは、一八九七年の時点では、大方の会員が工場、

店、事務所などに勤め、何人かの教員や幼稚園教師がいたということであった。職種の違いや興味の違いが会員同士によい影響を与えていたという。開設後三十年間ずっと住み続けた会員も一人いて、十年以上という会員も複数いたといわれている。女性たちを雇っていた工場主など、自らの都合のよい意見を通すために寄付を申しでる者があっても、そのような金を排除して独立性を保っていた。ある調査員は、ジェイン・クラブのような宿泊施設は、「間違はなく權威に対する反乱である」と述べたが、その成功によってシカゴ近郊だけでなく他の都市にも次つぎと同様の施設が生みだされていったのである。

『長い一日』の主人公は、ホームレスとなつて夜の街をさまよつたのち、働く女性を支援する施設の援助を受けるものの、その施設を慈善依存の立場に追い込むとして評価せず、代る改善策として、働く女性が気軽に利用できる廉価なホテルの建設を提案している。その提案のもっとも重要な点は、働く女性の自立心や自尊心を損なうような、「慈善に似たものであってはならない」（二八六）というものである。ジェイン・クラブの活動は、この点においてリチャードソンの主張にそつたものであり、その提案より約十五年も前からそれを実行していたことになる。

会員の誰もが発言権をもつて民主的に運営したというジェイン・クラブの成功は、四年生で学校をやめ、病気の母親の面倒みながら女工として働いていたケニーの経験と、そのような彼女をとおしてよりいっそう困窮者の現実を目を向けることのできたアダムズの互恵関係によつてもたらされたものと考えられる。その意味では、ジェイン・クラブは、ケニーとアダムズの関係をもつとも端的に象徴するものといえるであらう。

V 移民たちのオアシスとしてのハルハウス

『二十年』は、アダムズ自身がその序文で述べているように、雑誌などに掲載された記事を多く含んでおり、書きおろしの自伝ということではない。アダムズは一九〇七年から一九一六年の十年間にこの自伝を含む六冊の本を出版し、百五十以上のエッセイやレポートを書いているが、その多くが『レディーズ・ホーム・ジャーナル』『アメリカン・マガジン』『マクリュア』など、当時の人気雑誌に掲載されている。⁽⁹⁾これらの雑誌は、それ以前に創刊された『ハーパーズ』や『スクリブナーズ』などの雑誌と比べ、より多くの広告や挿絵を掲載し、より幅の広い読者層の獲得を目指して、値段も十セント、十五セントと格安であった。ラジオや映画などの電子メディアが流行する以前のアメリカで、全国的規模で情報を伝える唯一のメディアとして、五十万から百万の発行部数を誇っていたが、アダムズの名声は、二十世紀初頭のこのような新しい雑誌の流行によってアメリカ中に広まったといえるのである。

この時期、雑誌同様の変革を遂げた新聞にとっても、彼女は「よいネタ」であり、小さな町の新聞さえもその本やスピーチについての記事を掲載していた。「オクラホマのジェイン・アダムズ」というような一般化も頻繁で、あちこちで、地元の「ジェイン・アダムズ」が次つぎ生まれたともいわれている。神格化はさらに進み、アトランタのある新聞は、「ジェイン・アダムズは慈悲深く、気高く、公共性に富み、善良なるものすべてと同義である」とまで書いていたのである。

アダムズがこのようにジャーナリズムの寵児になった理由として、彼女の伝記作家アレン・デイヴィスは、彼女の表象するイメージが、都市の貧困などに漠然と罪の意識を感じていた、アメリカの中産階級層や上位中産階級層に安心感を与えたとみている。彼女が二十世紀初頭までに全国的名声を獲得していたとしても、人気雑誌のおもな購読者層を形成していた中産階級層以上の人たちの間であって、大多数の貧しい人は、彼女の本や記事を読むことも、講演を聴くこともなく、彼女の存在すら知らずに自分の仕事をしていたとすれば、デイヴィスの見解は正しいといえる。生活に不安のない人びとは、ジャーナリズムの助けを借りて、彼女をアメリカのヒロイン扱いすることで、自らの罪の意識を軽減していたともいえるだろう。

だが、記事が雑誌などに掲載され、本の内容や講演の様子が新聞などで紹介されることは、自らの考えを広め、運営のための寄付を募るには好都合で、この意味では、アダムズはそれ以前の活動家とは比較にならないほどの利点をもっていたともいえよう。⁽¹⁰⁾ アダムズは、メディアが書きたてる賞賛の言葉には気に入らないものもあったようだが（ナイト 二八〇）、メディアの威力も十分意識していたと思われる、そのことは、その初出が当時の人気雑誌であった『二十年』を読んでも明らかである。具体的な事例をふんだんに取り入れて説明がなされ、平明な書き方が徹底されているのは、自分の活動をより多くの読者に広めようとした意図があったことであろう。

アダムズに対して批判がなかったわけではなく、そのことは『二十年』においても多々言及されているが、とくに、急進派や労働組合の指導者と親しすぎるという批判は多かった。第一次世界大戦の折には戦争反対を唱えたことで、FBIの危険思想者リストにも載せられていた。アンジア・イージアスカの作品、たとえば、

「フリー・バケーション・ハウス」や「アメリカは私にとってどのような国か」などに登場する無神経な慈善家が示唆するように、施しを受ける側の気持ちがどのようなものであったかを考えるべきではないかという問題が残らないわけではない。だが、アダムズのハルハウスでの活動に対する評価は、その近くに住み、直接関わった人びとによって語られるとき、一つの真実を提供するであろう。この意味で貴重なのは、十歳でポーランドからアメリカに移住したユダヤ人ボラチェックの自伝である。近くに住んでいた名もなき移民女性の視点で、ハルハウスとアダムズが語られているからである。

ボラチェックの自伝では、世界中からやってきた貧しい移民の子どもたちとともに、ハルハウスのクリスマス・パーティに初参加した様子が描かれているが、彼女はのちに、その時から自分が「忠実なアメリカ人」(五二)になったと述懐している。「子どもの心から恐怖心を払いのけること以上に一人の人間が自国に対して奉仕し得ることはなく」、アダムズが「そのパーティでそれを私にしてくれた」と述べている(五二)。クリスマスは、ユダヤ教信者の移民が多い地域ゆえに宗教色を全面に出すことはなかったハルハウスが唯一行っていた宗教行事であったが、ボラチェックは、母親に内緒で出かけて行ったパーティで初めてアダムズに会い、それを契機としてアメリカ定住の道を歩み始めるのである。

彼女は約四十年後のアダムズの葬儀まで見届けているが、移住直後の幼い工場労働者であった時から一貫して、彼女にとってハルハウスは「砂漠のオアシス」(六八)であり、アダムズは「人生の最後の支え」(一七七)であり続けた。訃報に接したハルハウス周辺の人びとは、自分たちの工場や店を宗教や出身国の違いをこえて一様に紫と黒の布で覆い、紫でアダムズの人生の「高貴さ」に敬意を払い、黒で自分たち移民の「深い哀

悼の意」を示したという（二七七―七八）。これこそ、アダムズがもともと望んだ自分への評価だったといえるだろう。彼女は、移民たちへの偏見が根強く、移民排斥の動きもあったなかで、いち早く労働博物館をハルハウス内に作り、移民たちが出身地の文化を大切に次世代に伝えつつ、アメリカ文化との懸け橋になるようにと願っていた。葬儀の際のハルハウス近隣の移民たちの行為は、彼女のこの真意がもっともよく理解されていた結果であろう。

注

- (1) 引用部分の邦訳は、『アメリカの女性の歴史』については小檜ルイ他訳、『人物アメリカ文学史』については足立康訳、『ハルハウスの二十年』については、縫田ゼミナル訳を参照。その他については拙訳。また、『千年』からの引用については、Tと略記し、頁数を付して示す。
- (2) アメリカにおける女子高等教育については、サラ・エバンズ（二三九、一四七―五〇）、リン・ゴードン（一一五―）、バーバラ・ソロモン（四三―七七）を参照。
- (3) アダムズの女性参政権に関する見解については、アレン・デイヴィス（三二六、一九―二〇、一八六―八八）、エミリー・ジョンソン（九九―一二五）を参照。
- (4) アダムズは、学生時代からトルストイの著作を読んでその思想に傾倒し、一八九六年にはロシアまで会いに出かけているが、『千年』にも書かれているように、その面会は、両者の差異を決定づけるものとなった。アダムズの着衣の「ぜいたくさ」をトルストイが咎め、そのような服を着ていることが「民衆への障害にならないか」と尋ねたことを契機としている（T一四四）。地主意識が捨てきれず、「パンを稼ぐ労働」をしていないと批判されたわけだが、彼女はその後パンを焼くために毎朝一時間を費やす決意をするものの、やがては「現実の人生はトルストイが思うほど理論とおりにならないのではないか」（T一四七）と考えるように至っている。
- (5) カーネギーは、その行動においては、スペンサーの教えに反することを数多く行った（本間 一二三）。『富の福音』において、富はその獲得に

優れた者が社会に役立つように使うべきだという主張を展開しているように、世界一の富豪となった彼は、図書館、教会オルガン、カーネギー・ホールなどを寄付し、その富を社会に還元している（二二）。その矛盾した言動から、カーネギーがスペンサーの哲学を理解していなかったのではないかという意見もあるが、スペンサーがカーネギーを「アメリカの最良の友人の一人」と呼び、カーネギー自身、社会進化論者であることを任じていたことも事実である（二三）。

（6） ケリーのハルハウスにおける活動については、とくにキャスリン・スクラー（2）（六五八—七七）を参照。

（7） ケニーの自伝的事実及びハルハウスにおける活動については、彼女の自伝、リマ・シュルツ編集によるウェブサイトに、デイヴィス、メアリー・マックリー（三四—三五）、ジョアン・マイアロウィッツ（九六—九八）、バーバラ・ワートハイマー（二〇六—〇七、二六七—六九）を参照。

（8） シカゴで働く女性についての統計は、マイアロウィッツ（一一—二〇）を参照。

（9） アダムズとジャーナリズムとの関係については、デイヴィス（一九八—二二一）、リチャード・ホーフスタッター（二八六—二四）、林瑞婉（四五—八四）を参照。

（10） ハルハウスの資金面については、スクラーの「誰がハルハウスに資金を提供していたか」に詳しい（九四—一一五）。開設当初は父親から譲り受けたアダムズ自身の私財が投入・運用されていたが、その後数多くの資産家から土地や施設などを含む莫大な寄付を得るようになり、アダムズのパートナーのメアリー・ロゼット・スミスやシカゴの資産家ルイーザ・デコーヴェン・ボーエンなどはその筆頭にいたようである（一〇三、一〇七）。小額の寄付も多く、たとえば、一九〇三年には、ハルハウス運営費約二万七千ドルのうち、半分以上を寄付に頼らなければならなかったが、その約三分の一は小額の寄付であったという（デイヴィス 一〇六）。アダムズは、鋭いビジネスセンスをもって資金集めに能力を発揮し、つねに見知らぬ人に寄付を依頼する手紙と寄付に対する礼状を書いていたといわれているが（二〇九）、メディアによって有名になったことは、このような寄付集めには好都合であったと思われる。

引用文献

杖記記念会 一九九六年

- Addams, James. *Twenty Years at Hull House*. 1910. N. p.: Dodo, n. d. 『ヘルハウスの20年』財団法人市川房枝記念会・縫田ゼミナル訳 市川房
- Banner, Lois W. *Women in Modern America: A Brief History*. New York: Harcourt, 1974.
- Brown, Victoria Bissell. *The Education of Jane Addams*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2004.
- Buhle, Mari Jo, and Paul Buhle. *The Concise History of Woman Suffrage: Selections from the Classic Work of Stanton, Anthony, Gage, and Harper*. Urbana: U of Illinois P, 1978.
- Davis, Allen. *American Heroine: The Life and Legend for Jane Addams*. New York: Oxford UP, 1973.
- Dreiser, Theodore. *Sister Carrie*. 1900. New York: Norton, 1991.
- Eisenstein, Sarah. *Give Us Bread But Give Us Roses: Working Women's Consciousness in the United States, 1880 to the First World War*. London: Routledge, 1983.
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: Free, 1989. 『アメリカの女性の歴史 自由のたもとに生まれ』小
檜山ルイ・竹俣初美・矢口祐人訳 明石書店 一九九七年
- Fradin, Judith Bloom, and Dennis Brindell Fradin. *Jane Addams: Champion of Democracy*. New York: Clarion, 2006.
- Gordon, Lynn D. *Gender and Higher Education in the Progressive Era*. New Haven: Yale UP, 1990.
- Hill, Joseph. A. *Women in Gainful Occupations 1870-1920: A Study of the Trend of Recent Changes in the Numbers, Occupational Distribution, and Family Relationship of Women Reported in the Census as Following a Gainful Occupation*. Westport: Greenwood, 1978.
- Hofstadter, Richard. *The Age of Reform: From Bryan to F. D. R.* New York: Knopf, 1955.
- Johnson, Emily Cooper, ed. *Jane Addams: A Centennial Reader*. New York: Macmillan, 1960.
- Kelley, Florence. <1> *The Autobiography of Florence Kelley: Notes of Sixty Years*. Ed. Kathryn Kish Sklar. Chicago: Charles H. Kerr, 1986.

- , 〈2〉“The Need of Theoretical Preparation for Philanthropic Work.” *Autobiography* 91–104.
- Kenny, Mary. “Mary Kenny.” *Eighty Years at Hull-House*. Ed. Allen F. Davis and Mary Lynn McCree. Chicago: Quadrangle, 1969. 34–35.
- Knight, Louise W. *Citizen: Jane Addams and the Struggle for Democracy*. Chicago: U of Chicago P, 2005.
- Lasch, Christopher. *The Social Thought of Jane Addams*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1965.
- Meerowitz, Joanne J. *Women Adrift: Independent Wage Earners in Chicago, 1880–1930*. Chicago: U of Chicago P, 1988.
- Nash, Roderick. *From These Beginnings: A Biographical Approach to American History*. Vol. 2. New York: Harper, 1978. 『人物アメリカ史』足立康記 第二巻 新潮社 一九八九年
- Polacheck, Hilda Satt. *I Come a Stranger: The Story of Hull-House Girl*. Ed. Dena J. Polacheck Epstein. Urbana: U of Illinois P, 1989.
- Residents of Hull-House. *Hull-House Maps and Papers*. 1895. North Strand, NH: Ayer, 2004.
- Richardson, Dorothy. *The Long Day: The Story of a New York Working Girl*. 1905. Charlottesville: UP of Virginia, 1990.
- Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*. New York: Penguin, 1997.
- Rousmaniere, John P. “Cultural Hybrid in the Slums: The College Woman and the Settlement House, 1889–1894.” *American Quarterly* 22. 1 (1970): 45–66.
- Schultz, Rima Lunin, ed. *Urban Experience in Chicago: Hull-House and Its Neighborhood, 1889–1963*. Aug. 2008. <http://www.uic.edu/jaddams/hull/urbanexp>.
- Scudder, Vida. *On Journey*. New York: Dutton, 1937.
- Sklar, Kathryn Kish. 〈1〉 *Florence Kelley and the Nation's Work: The Rise of Women's Political Culture, 1830–1900*. New Haven: Yale UP, 1995.
- , 〈2〉“Hull House in the 1890s: A Community of Women Reformers.” *Signs* 10. 41 (1985): 658–77.
- , 〈3〉“Who Funded Hull House?” *Lady Bountiful Revisited: Women, Philanthropy, and Power*. Ed. Kathleen D. McCarthy. New Brunswick: Transaction Publishers, 1997.

wick: Rutgers UP, 1990. 94-115.

Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985.

Solomon, Barbara. *In the Company of Educated Women*. New Haven: Yale UP, 1985.

Starrett, Helen Ekin. *After College, What? For Girls*. Boston: C. J. Peters, 1896.

Tax, Meredith. *The Rising of the Women: Feminist Solidarity and Class Conflict, 1880-1917*. New York: Monthly Review, 1980.

Trattner, Walter I. *From Poor Law to Welfare State: A History of Social Welfare in America*. New York: Free, 1974.

Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820-1860." *American Quarterly* 18 (1966): 151-74.

Wertheimer, Barbara Mayer. *We Were There: The Story of Working Women in America*. New York: Pantheon, 1997.

Wheeler, Leslie A. *Jane Addams*. Englewood Cliffs, NJ: Silver Burdett, 1990.

Whitcombe, Eliza P. "The Jane Club of Hull House." *The American Journal of Nursing* 2. 2 (1901): 86-88.

本間長世 「社会進化論とアメリカ」『社会進化論』齊藤真他編 研究社 一九七五年 五一-四頁

木原浩信 <1>『J・アダムズの社会福祉実践思想の研究』川島書店 一九九八年

<2>『ジェーン・アダムズ』大空社 一九九八年

林瑞婉 「革新主義時代の大衆雑誌における改革の言説と社会教育」『レディーズ・ホーム・ジャーナル』とジェーン・アダムズ』『同志社アメリカ

研究』四〇号(二〇〇四年)・四五-六四頁